

子どもの権利をめぐるポーランドの状況

ジャドウィガ・シコルスカ

OME P 「子どもの権利条約」東京フォーラム講演より
一九九一年十一月二十二日・お茶の水女子大学講堂にて

ご来席の皆様こんにちは。今日はこの席で皆様にお話しできることを大変光栄に思い、この機会を与えて下さったことに、大変感謝いたしております。

はじめに、コルチャック先生の言葉を、皆様にお伝えしたいと思います。

——私は、愛されたり、尊敬されたりするために存在しているのではない。しかし、私は、行動をし、人を愛するために存在するのだ。——

*

歴史上には偉人と呼ばれる方々がたくさんいますが、特に優れた偉人というのは、特に優れたユニークな個性を持ち、時を超えてその重要性がいつまでも保たれるわけで、又、社会的にいろいろな変化がおこっても、常に私達のインスピレーションの源となり役立ってくれるのです。

私が本日お話ししようとすることは、ポーランドのみならず、全世界に対して大きな影響を与え、「子どもの権利」に関する運動の先駆者となったこの素晴らしい偉

人についてお伝えするということで、非常にむずかしい仕事であると思っています。

その人は、ヤヌシュ・コルチャックという名で知られています。本名は、ヘンリッヒ・ゴールドシュミットという方です。彼の専門は医者ですが、実際の仕事は教育者でした。又、大人や子どものための本の著者でもあり、素晴らしい文才のあった方です。具体的には、教鞭をとって教えてもいましたし、多才な人で、子どもの問題について生涯をささげた人でした。彼は著書の中で「子ども達を自分の息子のように思い、その子ども達のためにつくす人生を選んだ」と述べています。そして、その言葉に忠実に生き、生涯をこの仕事にささげました。しかし残念なことに、一九四二年、ナチの死の収容所において、子ども達と一緒に悲劇的な最期をとげました。

コルチャックは、一八七八年ワルシャワで生まれ、医学校を卒業した後、数年間、小児科の病院に勤めました。一九二二年には“Dom Sierot”ドム・シエロットという孤児院の院長

になりました。この孤児院は、ユダヤ人の子どもの為のものでその後三十年間、この仕事を続けました。

第一次大戦後は“OUR HOME”私達の家という名の、ポーランドの子ども達の為の孤児院を、仲間と共に設立しました。

非常に若い頃から、いろいろな社会的な場のいろいろな組織で盛んに活動していました。医師や教師として活躍し、医学的・教育的知識の普及に努めました。

著作の仕事は、一八九六年に始めて以来、二〇冊以上も本を出版した他、一〇〇余りの雑誌等に一〇〇〇余りの文章や論文を書いています。先生の著作は、大人向けもありますが、子どもに対して書かれたものもあります。先生の著書の多くは、近代的、教育的な文章や作品の典型的な例・モデルとなっています。又、いろいろな伝統的、教育的な様式のものもありましたが、これを更におすすめして、より近代的にしたという点で意味がありました。当時のマスコミの力も利用していて、例えば、子どもによって編集された、子どものための、子ども達の

問題を扱う雑誌というものも存在しています。又、先生は映画に対しても非常に興味がありましたし、放送にも興味をもっています。小さい子ども達にむけてのラジオ放送をしました。

ごくごく手短かに先生の経歴をお話ししましたが、もうお分かりと思いますが、先生は存命中からもう、社会的な権威として認められていました。先生は、子ども達の友人として、保護者として生涯をささげられたという、伝説的な存在でありますし、子ども達のための殉教という亡くなり方をしたということで、子どもの権利の擁護者の国際的なシンボルとして認められています。子どもの権利の擁護、法的な取り決め、あるいは善意の普及、そして子ども達の必要に関する研究・分析、そういったものが、まさにコルチャック先生の人生そのものでした。

この分野での先生の仕事は、今でも目を見る素晴らしい内容です。そして、教育学者、教師、心理学者、小児科医というような専門家の方々にとっても、今だに新

鮮な、共通する問題でもありませんし、こうした専門家はかりでなく、子どもの友人である人々全てにとって、先生の掲げた理念は、新鮮なものを持っています。

先生は医師の立場から、子どもの発達について、体、心、そして社会的なことに関し専門的な知識を持っていました。長年に渡り、子どもの観察を続けていきました。著書など色々な形で文章がたくさん残っています。それを見ますと、もう先生の中では、教育に対する独特な概念や、自分なりのシステムを作り上げていたようです。その基本となるのは、子どもは、すでに一人の人間である”という考え方でした。

人間の二十歳までの発達のプロセスについての先生の先駆的な知識について言えば、子どもの発達の特徴についての彼の見解は、今だに価値のあるものなのです。この、先生が専門とされていた研究は、現在新しい流れとして出てきたオーキソロジー(AUXOLOGY)という考え方と非常に似ています。これは小児医学の一つの流

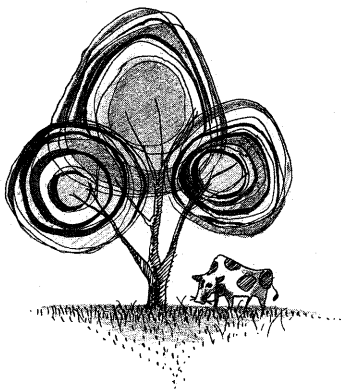
れとして発達しているものですが、このオーキソロジとは、ギリシア語のオーキソロールという言葉からきていて、大人になっていく子どもという意味があります。

先生は、そういう子どもの心理的、肉体的な総合体としての発達に興味を持っていましたが、このオーキソロジの研究をしていくために、先生が経営していた数々の孤児院の子ども達を観察していた訳です。そして、これは教育的な施設として活用していきました。

先生は、長年に渡りご自分の施設の中で、専門の仕事として研究を続けていた訳ですが、この事は、長期的な、非常に重要な、科学的価値を持った、オーキソロジの研究を総合的になしてきたということになった訳です。残念なことです。第二次大戦中、先生の著書——かなり大作のもので、集められていた長年にわたるご苦労の賜——全てが紛失しました。ごく一部のものは、すでに出版されていたために本として残っています。

先生は「健康な子ども達の発達」ということに、特に

興味を持って研究していました。著書の中で、「今まで私達は、病気であるという状態の子どもについてばかり研究してきた。そして子どもが発達していく中で、特殊な器官だけの成長を解剖学的な見地から研究してきたにすぎず、子どもの肉体ということに関して本格的な知識は、未だにない。ようやく今、健康な子どもから学ぶと



いう研究が、ごく最近、始まったばかりだ。今まで百年の間、病院が子どもの研究の場になっていた。教育的な施設における健康な子どもの研究はなされていなかった。」と述べています。

先生は、医師として特にオーキソロジー、心と体の両方の発達ということに興味をもっていました。中でも特に、人間の発達の特別な特徴を理解するための研究方法を得る必要性があるということを主張し、総合的な知識をとりまとめるべきだ、と考えていました。そして、この活動はすべて、両親や教師の仕事を助けるためにするべきであると考えていました。

子どもの権利、つまり、健康な発達をとげることができるということを確認する権利、これこそが、先生が推奨してきたことです。先生自身、子どもの発達について深い知識を持っていました。先生の仕事はとてもシンプルでわかりやすく、又、とても考察的で、するどい内容をつけており、子どもの成長・成熟という複雑な現象に対し、完璧な理解をされているということ、これが、ま

さに私達の尊敬するところなのです。先生は著書の中で、「子どもというのは、日夜、成長していくものである。寝ている時も起きている時も、喜んでいる時も、悲しんでいる時も、いたずらしている時でさえ成長している……」という言い方をしています。又、「あなたの前に立って本当に真剣に見つめている時でさえも成長している。：成長にはリズムがあり、春には速くなり、秋には穏やかになる。：頭は非常に速く成長する。時には心の成長が追いつかない時もある。不足する時も、過剰になる時もある。又、体内にある色々な腺の働きが活発になったり、活動が止んだりということが互いに関連している。：」と述べています。

先生はご自分の体験を通して、観察をいつも確認するという必要性を感じていました。例えば、一連の器官の中で何が一番重要なのか、何が最も大きな成長となっているのか。ある組織について言うと、周りの器官がそれぞれ急激に成長しているのか、あるいは、一部の器官だけが、今その時点で成長しているのか。心肺系に関して

言うと、例えば、心臓や血管、脳の組織への酸素の供給プロセスが質的に変わったりしています。そうした、全体的な流れに対し、どんな健康があり、どんな影響があるのか。栄養素を運んでいる血液の流れにどういう影響があるのか。そしてその様なプロセスに、腺の発達というのは、どんな役割があるのか。：というようなことを常に見守っていました。

先生は、子ども達の成長・成熟に関して、色々な多様性・個性差をもつ心理面についても興味を持っています。性別によっておこる変化についても、著書の中で述べています。子どもの権利の擁護という立場からも特に重要な本ですが、子どもをいかに愛するか“*How to love the child*”という本を書いています。特にこの中でも“*The child in the Family*”——家族の中の子ども——という章は非常に重要なものです。

先生は、子どもが健康に発達する権利を認めているばかりでなく、むしろ健康を増進していくべきだと考えて

いる訳で、これは「子どもの権利宣言」や一九九〇年の「子どもの権利条約」の基本理念と、まさに一致するのです。

この先生の基本的な考え方は、子どもが平和のうちに完全な幸福な発達をとげることを約束しなければいけないということ、GOBIプログラムと類似しているということに気づかれると思います。これは、特に開発途上国において、子どものための革命とされていますが、WHO・世界保健機構のイニシアチブのもとに繰り広げられているプログラムです。「紀元二〇〇〇年までに全ての人々へ健康を」というスローガンの一部としてこのプログラムが発展しています。コルチャック先生は、この考え方をすでに一九二〇年か三〇年代に言っています。

先生は、教師と医師が共存して子どもの発達を観察すると、両方の影響によって、より適正な子どもの成長に関する診断を確立していくことができると考えていました。先生は、発達について大変な深い知識を持っていた

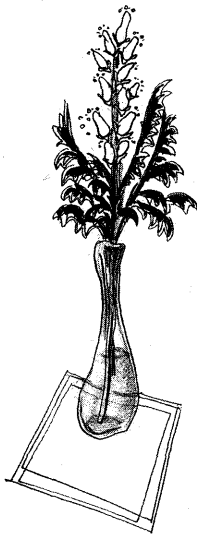
にもかかわらず、それはまだまだ完全ではないことも自覚していました。著書の中で「私達は今、問題の答を解こうとしている。つまり発達とは何か、という問題に取り組んで、これに答えていくには、この先何年もかかるだろう。…一生かかるかもしれないし、一生かけても答はでないかもしれない。…私達はいろいろ観察を続けて、それをどんどんためていけば、しだいに真実に近づくだらう。」と述べています。

子どもの生きる権利は、今の近代社会の中では、“Quality of life”——人生の質と言われていますが、実は、先生はもうご自身の活動や著書の中で、これを中心的な考え方としていました。

先生は、子ども達にとっても、この「人生の質」を確保する必要性をうたっています。この「人生の質」とは、身体的、感情的、そして知的、なおかつ社会的なニーズが満たされるものということです。そしてこれによって他のことも良くなる、——子どもは大人に比べ社会生活において、より依存的な立場にあるので、この様

な子ども達の生活の質を獲得しなければならないと言っています。

先生は、子どもの権利のため、様々な努力をしていますが、これらの活動によって子ども達を法的に守るべきである、ということに気づいた最初の人だったといえます。又、子どもの権利を守るといふ、その子ども達を代表して、法的な、国際的な動きを作っていかなければいけないと考え、そのことにつくしました。



ここで、是非、紹介したい先生の論文があります。

「尊敬を得るといふ子どもの権利」という題名で、これは先生の活動を総体的にまとめたようなものです。

子どものためのマグナカルタ・リベルタ、自由憲章を制定したのは、まさに先生ご本人でして、その子どもと
いうのは、成長という大変な仕事を背おっています。そ
して愛され、独立した人間としてその権利を認められる
必要があるということです。一九二三年のジェノバ宣言
に関しては、批判的な言葉を述べています。と申します
のもジェノバにおける法律の制定者は、権利と義務の区
別をきちんと行っていない、そしてこの内容も勧告、お
願ひ程度にすぎず、法的な強制力はないし、このアピー
ルは善意にうったえかけるもので、親切をこい願ひとい
るだけのものだと言っています。

子どもたちの生活を実際に見たり関わっていく中で、

先生は子どもたちにとって当然の権利についてリスト
アップしています。その中で私自身が重要だと思った点
についていくつかあげてみます。

○大人と一緒に話し合ったり協力しあったりする権利

○まず自分の考えを表現する権利。そして自分自身がど
んな行動をとるか判断する権利

○向上のためにまちがいをすること、及び、よろこんで
努力する権利

○今日、子どもであるということの価値を認められる権
利——つまり子どもがありのままになりうること、人
間として完全な価値があるということを認めること

○そして死ぬ権利

コルチャック先生は、もっと細かく子どもの権利を述
べていますが、例えばその中でもいくつかあげてみます
と、○お母さんの母乳で授乳される権利 ○不妊の権利
○学校へ行き本をもらえる権利 ○先生に公平に扱われ
る権利 ○自主的な組織を作る権利 ○独立の権利 ○
個人的な財産を持つ権利

先生はいつも斬新的な先がけ的な仕事をされています
が、新しい教育の原則というものを考えました。子ども
を主体としての独自の存在として認めるということは、

今でも斬新な考え方です。先生はとても感受性のすぐれた、思いやりの深い方でしたので、子ども達の独特な考え方、感じ方、価値判断というものを発見しました。先生の教育に対する基本の考えは、互いに平等な関係、一方は非常に経験をつんだ人、もう一方はあまり経験をつんでいない人という両者の協力と相互作用によってなされていくことです。

子どもの権利を認めるということは、具体的には、つまり、子どもだけの自主的な社会組織を作り、これらの権利を尊重するように大人にアピールしていくことだというのを、先生は生涯信じていました。先生ご自身の言葉によると、「これからは非常にオープンでフランクな時代がくる、その時には大人の生活と子どもの人生が全く平等に語られるだろう。」と語っています。先生は、子どもを人間としてとらえるという考え方に賛同していました。彼のシステムの特に原則的なこととはいいません。

○子ども達が自分たちの教育のプロセスに対し関わりあ

いをもって参加していく。

○子どもに自己向上の活動を行わせる、つまり、自分達の間でおこった争いは自分達で調整していくこと、子ども自身で新聞を編集する。

ということなどです。先生は、子ども達に明るい喜びに満ちた状態を与えてやることで、世界を変えることができると考えていました。よろこびの中で成長し、ヒューマニズムの考えの中で教育をうける、人種、宗教、国籍といった区別なく、全ての子ども達にこの様な素晴らしい機会を与えることによって世界を変えることができる、と考えていました。先生はこの様に子どもを一人の人格としてとらえるというアプローチだけに限って活動していた訳ではなく、もっと社会的な活動の中から、子どもを一つの社会の一要因としてとらえていました。子どもは社会の中でも非常に重要な部分を占めるということ、そして人間性という問題においても、子ども達が主要な位置を占めるといって考え方です。

コルチャック先生の一生とその仕事について何とかまとめようと思ったのですが、残念ながら時間となりましてので、結論としてとりあえず、お話しします。

先生は医師、作家、教育者——子どもの育児、保育に對し非常にグローバルな見方をした著書を多く残した作家であり、実際の臨床医でありましたし、教師、心理学者、社会学者、生態学者でもあった訳です。それと共に法律家、弁護士でもあり、又、財務担当者でもあり、企画者でもあった、という多様な才能を持っていました。今でこそ広く受け入れられているのですが、子どものためにコンサルテーションチームと呼ぶような相談チームを作っていくべきであると考えていました。

先生のお考えはいろいろありましたが、今日、ようやく当然のこととして受け入れられてきましたし、多くのものが子どもの権利条約に、みごとに生かされているということは大変素晴らしいことだと思えます。子どもは、全世界にとって、将来の全てであり、未来そのものであるという考え方。

先生ご自身の作品の中で美しい比喩を使ってこのことを述べています。

「子どもは蝶である。人生の濁流にのって飛んでいる蝶である。私達はどうすれば、この子ども達の蝶としての一生に障害を与えることなく、又、耐久性をつけていくことができるだろうか。その羽を傷つけずにそれを強くしていくには、どうしたらよいだろうか。」という風に言っています。このことは、先生が私達に与えて下さった次の問題といえますか、挑戦であろうと考えております。

ご清聴どうもありがとうございました。

ポーランド前 O M E P 委員長
母子発達研究所長・小児科医

※ この原稿は、シヨルスカさんの講演・通訳の会場録音によるものです。
(編集部)